

ホタテガイに及ぼす振動の影響

田中 俊輔・尾坂 康

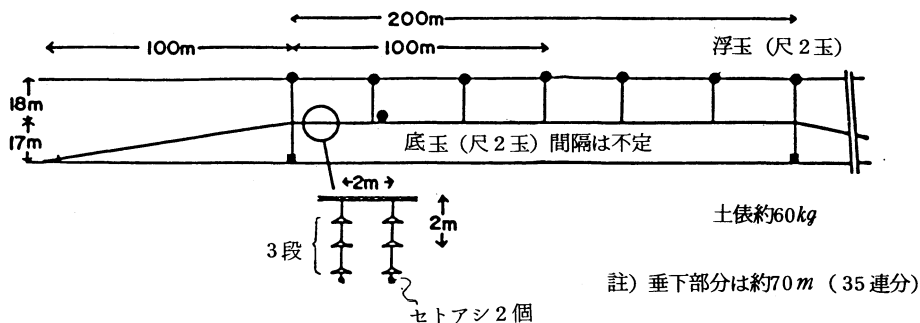
はじめに

垂下養殖ホタテガイの養殖管理の一つに養殖施設をできるだけ揚げずにホタテガイを動かさないようにすることがあげられる。

しかし、へい死や異常貝の見られない成貝では頻りに施設を揚げても何ら影響を受けることなく、さらに正常に成育するものと思われる。そこで、野辺地町漁協管内の垂下養殖施設に養殖経歴がはっきりしている成貝(53年産ホタテガイ)を貝毒検体用として垂下したので、検体回収時のへい死貝・異常貝の出現状況をみた。

材料と方法

1. 試験期間：昭和55年4月15日～56年3月24日
2. 調査項目：へい死貝・異常貝の出現状況
3. 試験場所：上北郡野辺地町漁協管内の垂下養殖漁場
4. 垂下養殖施設の設置：養殖施設を第1図に示すように、従来の実証試験施設に比較し、幹綱200mに対して浮玉の個数が7個と多く、たちきりは2ヶ所だけとした点が異なる。



第1図 垂下養殖施設

5. 供試ホタテガイ：青森市久栗坂実験漁場で垂下養殖中の53年産ホタテガイ成貝(平均殻長111.6mm、全重量157.0g、異常貝出現率0%、第2回分散からのへい死率4.3%)を55年4月上旬に取り揚げ、4月15日に試験施設に再垂下した。
6. 方法：ホタテガイはパールネットに7個ずつ収容し、パールネット3枚を1連とした。今までの実証試験ではホタテガイの安定を図るためにパールネットの改良を行ったが、今回はこれをせずに重りも従来のものに比較して約 $\frac{1}{2}$ の重量の

ものを使った。

検体を取るために養殖施設を4月に3回、5月に4回、6月に5回、7月に4回、8月に4回、9月に5回、10月に2回、11月に1回、1月に1回、2月に1回、3月に2回の合計32回揚げた。

結 果

それぞれの検体回収時の、へい死個体は21個体中0～1個と少なく、異常貝もなかった。

56年3月9日と24日に検体として持ち帰ったホタテガイの測定結果を第1表に示す。この時、へい死個体、異常貝はなかった。

第1表

測定月日	殻 長 (mm)	全 重 量 (g)	殻 巾 (mm)	貝殻重量 (g)	軟体部重量 (g)	生 殖 巢 量 (g)	生 殖 巢 数 指 数 (%)
56. 3. 9	129.93±3.42	251.3±19.9	32.73±3.23	133.3±6.5	100.7±10.2	25.3±5.1	25.1±3.2
56. 3. 24	125.03±3.01	221.3± 2.1	34.13±0.85	110.7±5.9	99.0± 6.6	20.7±5.1	20.7±3.9

ま と め

異常貝出現率が0%の成員(稚貝採取後約20ヶ月)をさらに一年間垂下し、その間に32回施設を揚げてもホタテガイ成員はへい死したり、異常貝にならないことがわかった。

なお、55年4月上旬の取り揚げ時には、ホタテガイ1個体の価格は40.6円になった。¹⁾ 今回の取り揚げ時には1個体の価格は79.3円(青森県漁連入札結果)と約2倍になったが、資材・施設の有効利用からは問題が残るように思われる。

参 考 文 献

- 1) 田中他：モデル養殖および増殖予備試験(昭和53年度)、ホタテガイ養殖技術研究レビュー、21～41頁